

イノベーション・マネジメント研究センター

I 2021年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2021年度大学評価結果総評】(参考)

イノベーション・マネジメント研究センターの2020年度の研究活動は、COVID-19感染拡大の影響で、計画どおりの運営が困難であったと察することができるが、学術雑誌への掲載、叢書2冊の発刊、ワーキングペーパーの発行については目標を達成し、活発な研究活動が行われた。シンポジウム・セミナー等は目標を下回ったものの、オンライン開催により参加者が増加した。公開講座もオンライン開催で、例年通り行われた。それぞれの評価項目ごとの場面で工夫がなされ、計画された年度目標がほぼ達成されたことは、高く評価できる。

研究成果に対する社会的な評価を測るため、書評や引用数などの把握は重要であるが、現状では十分把握していないとされているため、今後の課題として取り組んでいただきたい。

2021年度のイノベーション・マネジメント研究センターの評価項目は、適切に設定されていたと評価する。さらに設定された評価項目に対して、具体的な達成指標が設定されており、達成する努力が推し量れる点が評価できる。重点目標である「研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献」について、新型コロナウイルスの影響から、オンライン化、デジタル化等の新しい方式を取り入れながら、適切で活発な研究活動が行われるよう期待される。

なお、自己点検・評価シートでの自己点検において「問題点」が挙げられていなかったが、2020年度目標が概ね達成されていた場合についても今後の発展のために必要であると考えられる。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

当センターの活動について、十分に評価して頂いている。課題とされた研究成果に対する社会的な評価については今年度より学術雑誌へのアクセス数を掲載することとした。また、問題点についても挙げるようにした。2022年度も他研究所の取り組みなども参考にしながら引き続き適切で活発な研究活動が行われるよう運営していく。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

イノベーション・マネジメント研究センターでは2021年度の評価ではおおむね高い評価がなされている。課題として指摘された研究成果に対する社会的な評価の把握については、本年度より学術雑誌へのアクセス数を掲載することによって対応している。また、自己点検・評価シートにおいて「問題点」が記述されていなかったとの指摘に対しては、今年度より記述されている。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、研究所(センター)の目的を適切に設定しているか。

1.1①研究所(センター)として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。2018年度1.1①に対応

はい

※理念・目的の概要を記入。

理念

<http://riim.ws.hosei.ac.jp/outline/philosophy.html>

1. 顧客志向

すなわち、イノベーションに関する研究を進める研究者および実務家へのサービス提供と、社会還元を目標とする。

2. デジタル化対応

産業情報センターの時代から収集した紙ベースの情報を、デジタル化した形で配信することを目標とする。

3. ネットワーク・ハブ

国際シンポジウムなどの開催により、本センターを情報の結節点(ハブ)とする。

4. 産業官連帯

幅広いコンソーシアムの形成による産業界・官界との連携。

5. 研究の生産性向上

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

すぐれた研究者を集め、その研究の側面支援を行う。

6. 人間的連携

フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションを都心立地を最大限に活かして追求する。

目的（研究の必然性）

<http://riim.ws.hosei.ac.jp/outline/inevitability.html>

イノベーションの歴史、政策、統計、理論の探求は、社会経済発展のエンジンのメカニズムと持続性を理解する上で必須の研究領域である。経済学、社会学、心理学、工学を含む広範な経営学的英知を結集させることによって新たな研究テーマへの創造的な解を模索することが期待される。

1.1②理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。2018年度1.1②に対応

※検証を行う組織（各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

定期的開催する運営委員会において、研究プロジェクト、叢書、学術雑誌の寄稿等の募集を通じ理念・目的の適切性を確認している。

1.2 研究所（センター）の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

1.2①研究所（センター）の理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。2018年度1.2①に対応

はい

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

当センターは、様々な研究分野を専門とした所員で構成されている。専任・兼担所員は10学部・研究科の教員から成り、幅広い分野の見解を共有できるよう積極的に取り組んでいる。また、外部の研究者や実務家を客員研究員として迎え入れ、共同研究のための環境整備に取り組んでいる。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください

内容

当センターには専任所員がおらず、所長、副所長、運営委員は任期制で交代するため（再任可）、理念・目的の継承が必要である。交代時期をずらすこと、経験者を入れることで、円滑に引継ぎを行っている。

【理念・目的の評価】

イノベーション・マネジメント研究センターでは、6つの理念と1つの目的（研究の必然性）が掲げられており、目指すべき方向性を明らかにした理念と目的が設定されている。また、理念・目的の適切性を検証するプロセスとして、定期的開催される運営委員会において、研究プロジェクト、叢書、学術雑誌の寄稿等の募集によることを掲げている。

研究所の理念・目的は、研究プロジェクトの公表、シンポジウム、セミナー等の開催によって、教職員、学生への周知、及び社会への公表が適宜実施されている。

これらの取り組みは、10学部・研究科の教員による専任・兼担所員により行われているほか、外部の研究者や実務家を客員研究員として招き、共同研究のための環境整備を行っている点は高く評価される。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

一方で、専任所員が不在のため、所長、副所長、運営委員は任期制による交代（再任可）で務めていることから、理念・目的の継承の必要性を課題・問題点として認識しており、交代時期をずらすこと、経験者を再任することによって円滑化を図っている。こうした措置により、課題・問題点に対処している点は評価される。

2 内部質保証

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

2.1①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。2018年度2.1①に対応

はい

【2021年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・所員の構成は、所長1名、副所長1名、運営委員7名。
- ・2021年度は運営委員会を6回実施。運営委員会では、所員の委嘱、セミナーやシンポジウム等の催事の計画や報告、叢書の出版、その他当センターにおける運営事業全般について審議、報告する。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

運営委員会を定期的を実施することで、適切な運営業務を行っている。なお、運営委員も複数学部・キャンパスの教員に任命し多様な意見交換が出来るようにしている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

運営委員会が適切な運営を行っていると考えているが、第三者評価については未実施のため今後の課題である。

【内部質保証の評価】

イノベーション・マネジメント研究センターでは、2021年度は運営委員会を6回開催し、人事、研究活動、運営事業全般等について審議・報告がなされており、質保証活動に関する委員会は適切に活動が行われている。複数学部・キャンパスの教員を運営委員として任命している点が本研究センターの特質であるが、このことによって多様な視点からの意見交換が可能となる点も評価できる。

3 研究活動

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

3.1①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）2021年度1.1①に対応

※2021年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

1. 研究プロジェクト

- ①産業クラスターの知的高度化とグローバル化（洞口治夫）
- ②消費者行動とマーケティング研究会（新倉貴士）
- ③金融市場における情報伝播とその周辺に関する統計分析（高橋慎）
- ④日本における新たな鉄道経営史の構築（二階堂行宣）
- ⑤組織メンバーの日常行動とイノベーション創出（永山晋）
- ⑥イノベーションプロセス研究会（豊田 裕貴）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

- ⑦日本企業における「新たな国際化プロセス」に関する研究会（丹下 英明）
- ⑧企業家史研究会（長谷川 直哉）
- ⑨日本における企業内カウンセリング・EAPの課題と問題解決の方法 —企業イノベーションの観点から—（末武 康弘）
- ⑩ファンエンゲージメント概念の再検証（吉田 政幸）
- ⑪ディスクロージャーの変化と拡大（中野 貴之）
- ⑫情報ネットワーク利用とインタラクション（橋爪 絢子）
- ⑬起業家教育プログラムにおける心身メカニズムの研究（田路 則子）
- ⑭荷姿設定の最適化に関する研究（李 瑞雪）
- ⑮テリトリーと地域活性化（木村 純子）
- ⑯企業の合併・買収に伴うマネジメントに関する研究（福田 淳児）
- ⑰金融技術とファイナンス（山崎 輝）
- ⑱ESG研究会（竹原 正篤）
- ⑲クロスバージェント・チーム研究会（荒井 弘和）
- ⑳クラウドソーシング研究会（西川 英彦）

2. シンポジウム・セミナー等

- ①シンポジウム「グローバル・アントレプレヌールシップ -日米瑞台中のハイテク・スタートアップ- (Global Entrepreneurship: High-Tech Startups in Japan, US, Sweden, Taiwan and China)」2021年9月30日 YouTube Live
- ②シンポジウム「スタートアップ企業『X-mobile』のブランドマーケティング -偶有性という経営資源-」2021年11月16日～30日 YouTube 配信
- ③シンポジウム「ケースで学ぶブランド戦略 -『ブランド戦略ケースブック 2.0』刊行記念-」2021年11月27日 YouTube Live
- ④シンポジウム「コマースの興亡の行方 -商業倫理・流通革命・デジタル破壊-」2021年12月4日 対面（市ヶ谷キャンパス 富士見ゲート5階 G502教室）、YouTube Live
- ⑤国際シンポジウム「テリトリーが実現する持続可能な地域づくり -『イタリアのテリトリー戦略-甦る都市と農村の交流-』発刊記念-」2022年1月30日 YouTube Live

3. 公開講座

「パーパス経営の原点を探る」2021年10月23日、11月13日、12月11日 YouTube Live

【根拠資料】※ない場合は「特になし。」と記入。

- 1. 研究プロジェクト <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/project.html>
- 2. シンポジウム・セミナー等
<http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/symposium-2.html>
- 3. 公開講座 <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/lecture.html>

3.1②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）2021年度1.1②に対応

※2021年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

- 1. 学術雑誌1冊
イノベーション・マネジメント No.19
- 2. 研究叢書2冊
 - ①No.22 『現場の声から考える人間中心設計』橋爪絢子・黒須正明著
 - ②No.23 『イタリアのテリトリー戦略：甦る都市と農村の交流』木村純子・陣内秀信 編著
- 3. ワーキングペーパー
 - ①No.237 Determinants of Automobile Part Packaging Optimization: An fsQCA Approach
 - ②No.238 テリトリーに根ざした酪農のSDGsへの貢献 -コモンズの精神が実現する地域活性化-

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

③No. 239 On the Evaluation of Intraday Market Quality in the Limit-Order Book Markets: A Collaborative Filtering Approach
④No. 240 非営利組織における予算コントロールと目的達成度の評価
⑤No. 241 非営利組織における予算コントロールの機能
⑥No. 242 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター シンポジウム (オンライン開催)「グローバル・アントレプレヌールシップ-日米瑞台中のハイテク・スタートアップ-」講演録
⑦No. 243 非営利組織における事業計画と予算編成方針
⑧No. 244 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター シンポジウム (オンライン開催)「テリトリーが実現する持続可能な地域づくり —『イタリアのテリトリー戦略—甦る都市と農村の交流—』発刊記念—」講演録
⑨No. 245 組織調査 2020 の概要と基本的な発見事実
【根拠資料】※ない場合は「特になし。」と記入。
1. 学術雑誌 http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/journal.html
2. 研究叢書 http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/publication.html
3. ワーキング・ペーパー http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/working_paper.html

3.1③研究成果に対する社会的評価 (書評・論文等) 2021年度1.1③に対応

※研究所 (センター) がこれまでに発行した刊行物に対する 2021 年度に書かれた書評 (刊行物名、件数等) や 2021 年度に引用された論文 (論文タイトル、件数等)、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。なお、研究所 (センター) に該当するものがない場合は、研究所員によるものを含めることが出来る。但し、この場合は研究所の研究領域に関係するものとする。
1. 引用 新藤晴臣編『コーポレート・アントレプレナーシップ』(日本評論社、2021年12月)にイノベーション・マネジメント研究センター叢書 No. 19「田路則子著『起業プロセスと不確実性のマネジメント —首都圏とシリコンバレーの Web ビジネスの成長要因—』2020年3月」が引用された。
2. 叢書の書評については、当センター発刊の学術雑誌 (No. 19、2022年3月) で書かれている。 ①叢書 No. 20 『日本の企業間取引—市場性と組織性の歴史構造』金容度 (評者: 武田晴人) ②叢書 No. 21 『IFRS 適用の知見—主要諸国と日本における強制適用・任意適用の分析—』中野貴之 (評者: 米山祐司)
3. 学術雑誌 (J-STAGE) アクセス数・引用数 (2021年4月1日~2022年3月31日) ・アクセス数 (全文 PDF): 44,860 回 ・アクセス数 (全文 HTML): 10,039 回 ・被引用数: 16 件
【根拠資料】※ない場合は「特になし。」と記入。
1. イノベーション・マネジメント No. 19 http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/journal.html
2. 2021年度 J-STAGE アクセス統計 (2021年4月~2022年3月) より

3.1④研究所 (センター) に対する外部からの組織評価 (第三者評価等) 2021年度1.1④に対応

※2021 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。
特に第三者評価は受けていない。原則年 5 回の運営委員会を実施し適正な運営を行う。また所員懇談会を実施する。
【根拠資料】※ない場合は「特になし。」と記入。
特になし。

3.1⑤科研費及びその他外部資金の応募・獲得状況 2021年度1.1⑤に対応

※2021 年度中に研究所 (センター) として応募した科研費等外部資金及び 2021 年度中に採択を受けた科研費等外部資金について、研究担当者 (代表・分担の別)、研究種目、事業名、実施年度、交付金額の詳細を簡条書きで記入。

- ※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

<p><2021 年度中の応募></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 科研費：16 件 <p><2021 年度中の採択></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 科研費：7 件 <p>※いずれも代表者のみ、継続を除く。</p> <p>その他、民間企業との共同研究が 2 件あった。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし。」と記入。</p> <p>特になし。</p>

3. 1⑥研究所（センター）における研究活動に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。2021 年度 1. 1⑥に対応

<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ シンポジウム、公開講座のオンライン開催（YouTube、zoom） ・ 学術雑誌投稿時のペーパーレス化 ・ 学術雑誌レフェリー審査時のペーパーレス化 ・ 閲覧室の予約制導入 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし。」と記入。</p> <p>特になし。</p>
--

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<p>研究活動は活発で、研究プロジェクト等で研究力を高め、セミナー・シンポジウム等で研究成果を公表し、学術雑誌や叢書等の定期刊行物を発行することで外部への認知を高めている。所員に対しては、研究プロジェクト資金の助成、セミナー・シンポジウムのサポート（助成金含む）や、ワーキングペーパー発行の際の英文校閲料一部補助等、様々な研究支援体制を整えている。</p>

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に行っている場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<p>シンポジウムについて、授業や他部局のイベント等で希望する日程に会場が確保できない場合があること。日程は所員だけでなく、学外登壇者の都合も勘案する必要があるが、調整がつかず有識者の貴重な登壇機会を逃すことがある。</p>

【研究活動の評価】

<p>イノベーション・マネジメント研究センターの自己点検・評価シートでは 20 点の研究プロジェクトの設置、5 点のシンポジウム・セミナー等の開催、1 点の学術雑誌の発行、2 冊の研究叢書の発行、9 点のワーキングペーパーの作成が記載されているほか、被引用 1 件、叢書の書評 2 件、学術雑誌（J-STAGE）のアクセス数・引用数計 54,899 回、被引用数 16 回が示されている。</p> <p>科研費及び外部資金の応募・獲得状況については、応募が 16 件、採択が 7 件、民間企業との共同研究が 2 件であった。これらの実績から研究活動は高く評価される。</p> <p>COVID-19 への対応・対策については、シンポジウム、公開講座のオンライン開催、学術雑誌投稿時、及びレフェリー審査時のペーパーレス化、閲覧室の予約制導入を実施しており、十分である。</p> <p>これらの研究活動を通じて外部への認知を高め、また所員に対しては経済的支援を中心に多様な研究支援体制を整えており、発信力、支援体制ともに高く評価される。</p>
--

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

シンポジウムの会場確保や登壇者の調整を「課題・問題点」として掲げているが、前者はコロナ禍の状況下では致し方なく、後者は積極的な登壇希望者がある点で、むしろ評価されるべきである。

4 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

4.1①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフなどを配置することによる、教員の教育研究活動を支援する体制は整備されていますか。2018年度4.1①に対応

A: 従来通り効果的に取り組むことができた

※教育研究支援体制の概要を記入。

リサーチ・アシスタント (R・A) を雇用し、所員の研究補助など研究支援業務を行っている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし。」と記入。

特になし。

4.1②研究所 (センター) として、教育研究環境の整備に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。新規

※取り組みの概要を記入。

研究所会議室、閲覧室、事務室の定期清掃、換気、アルコール消毒液設置、パーテーション設置。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし。」と記入。

特になし。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

リサーチ・アシスタント (R・A) は「原則として本学大学院博士後期課程在学者・同修了者 (単位取得満期退学者を含む)。適任者がいない場合、本学大学院修士課程在学者・同修了者をもってあてることができる」としており、研究と教育の両分野において貢献している。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画 (既に実施している場合にはその進捗状況も含めて) をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

大学院生は社会人が多いため、日中に業務が出来る人材を確保することが課題である。

【教育研究等環境の評価】

イノベーション・マネジメント研究センターでは、リサーチ・アシスタント (RA) を雇用している。原則として本学大学院博士後期課程在学者・同修了者 (単位取得満期退学者を含む) を対象としており、教員の教育研究活動を支援する体制は適切に整備されている。一方で、RA を務める大学院生は社会人が多いため、日中に業務を遂行することが可能な人材を確保することを課題としており、こうした課題への対処が望まれる。

5 社会貢献・社会連携

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

果等を適切に社会に還元しているか。

5.1①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。2018年度5.1①に

対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組み概要を記入。

セミナーやシンポジウムを開催することを通じて最新の研究成果を社会に還元している。2021年度はすべてのセミナー・シンポジウムをオンライン開催とし（来場型との併用含む）、録画の公開も行ったため、時間・場所の制限を受けず多くの方に提供できた。また、デポジット・ライブラリーとして流通・消費財産業と企業経営に関する専門的な図書や社史、団体史、伝記、政策関連の灰色文献を収集し、研究活動を深めるとともに広く一般に公開している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

【根拠資料】※ない場合は「特になし。」と記入。

イノベーション・マネジメント研究センターYouTubeチャンネル（シンポジウムの録画公開）

<https://www.youtube.com/channel/UCZ9gQceyH3fNye-vePpBEA>

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

シンポジウムやセミナー等は、所員がコーディネートし開催している。登壇者は研究プロジェクトメンバーだけでなく、海外の研究者や企業の実務家等もお招きし、幅広い分野の様々な視点から議論をしている。2021年度においてもコロナ下ではあったが、イタリア人研究者3名に登壇頂き（zoomで日本の会場と接続し）、国際シンポジウムを行った。当日YouTubeライブで配信、後日録画配信をし、国内外の多くの方にご視聴頂けた。

また、当センターはデポジット・ライブラ

リーとして流通・消費財産業と企業経営に関する蔵書を保管し一般研究者にも閲覧サービスを提供しているが、一般的に流通していない灰色文献や社史については他の図書館に見劣りしない蔵書数がある。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

シンポジウムのオンライン配信は、その利便性から多くの方から好評を得ているが、対面開催を併用してほしいという声も上がっている。コロナの状況を鑑みながら、研究者と直接交流できる場として対面開催併用を検討していきたい。

【社会貢献・社会連携の評価】

イノベーション・マネジメント研究センターでは、セミナーやシンポジウムを通じて最新の研究成果を社会に還元している。登壇者は研究プロジェクトのメンバーに限定されず、学外、海外の研究者・実務家も招いて議論の場を設けた。2021年度はコロナ禍の状況下ではあったが、オンラインでイタリアの研究者3名の登壇によって国際シンポジウムを開催するとともに、当日のライブ配信と後日の録画配信によって国内外の人々に対してシンポジウムの様子を発信した。この点は、学外の組織・研究者との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動として高く評価される。

また、本センターはデポジット・ライブラリーとして、流通・消費財産業と企業経営に関する蔵書を保管し、一般研究者にも閲覧サービスを提供している。蔵書には一般には流通していない灰色文献や社史など、他の図書館に見劣りしないものもあり、これらの事実・実績についても教育研究に関する社会貢献活動として高く評価される。

一方で、シンポジウムについて対面での並行的開催を望む声に十分にに対応できていない点を課題としているが、これは本センター固有の課題ではないと考えられる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

6 大学運営・財務

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

6.1①運営委員会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。2018年度6.1①に対応

はい
※概要を記入。
規定や運用規則に基づき、定期的に運営委員会を開催し、運営方針や事業計画などを議論している。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし。」と記入。
特になし。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
運営委員会にて規程に則った適切な運営を行っているが、所員懇親会や所員アンケートにより運営委員以外からも広く意見徴収し議論に反映させている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
専任職員の配置が1名のため、事務手続きに不備がないよう円滑な引継ぎが必要。

【大学運営・財務の評価】

イノベーション・マネジメント研究センターでは、法政大学イノベーション・マネジメント研究センター規程と、イノベーション・マネジメント研究センター運用規則に基づき、年5回以上、運営委員会を開催していることが確認できる。所員の懇親会やアンケートによって、運営委員でない者からの意見聴取を行っている点は評価される。一方で、専任職員が1名であり、事務手続きに課題があるとしており、早急な人事の手当が望まれる。

III 2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	研究プロジェクトを公募し、研究のサポートを行うとともに、所員の研究成果を学術雑誌、研究叢書、及びワーキングペーパーの形で積極的に発信することで、学界に貢献する。さらに、特色あるデポジット・ライブラリーを構築し、他に類のない体系的な図書・資料をコレクション方式により重点収集、整理、公開利用を行うと共に、収集した図書・資料の活用を通じて調査・研究の向上に寄与する。
	年度目標	研究成果物の質と量の向上をはかる。所員に広く申請を促し、進捗管理を行う。
	達成指標	叢書2冊の発刊、学術雑誌に掲載する論文数10本（研究ノートや寄稿等も含む）、ワーキングペーパー10本を目指す。
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	叢書2冊の発刊、学術雑誌に掲載する論文数11本（研究ノートや寄稿等も含む）、ワーキングペーパー9本を発刊した。ワーキングペーパーのみ目標の10本に届かなかったが、英文での寄稿や、外国人研究者との共著も含まれ、質的評価ができる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

			その他、民間企業から研究経費を受入れ、共同研究を2件実施中である。
		改善策	英文ワーキングペーパーに対する英文校閲料の補助を研究所助成金を活用して行う。また補助制度について所員に広く周知し、申請を促す。
No		評価基準	社会連携・社会貢献
2		中期目標	継続的な資料収集を通じて、流通産業ライブラリーの充実を図ると共に、研究者また学生への資料提供を行うことで、流通・消費財産業の研究の促進、また人材の育成に貢献する。
		年度目標	継続的な資料収集と、これらの貴重資料の適切な保管、長期的な維持を目指した取組を行う。
		達成指標	特に貴重資料を中心に資料収集を行い、配置の際には除菌を施すこととする。また資料を保管している書庫の環境保全・発生防止に努める。
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		2021年度目録登録数1,279冊。寄贈及び購入により資料収集を行い、カビ除去を施した上で登録を行った。昨年度に実施したサーキュレーター・除湿器の設置が功を奏し書庫の環境は安定している。その上で引き続き今年度も書庫内清掃、資料除塵を行い、長期的に維持できるように保全に努めた。	
	改善策	—	
No		評価基準	社会連携・社会貢献
3		中期目標	公開講演会、シンポジウムを開催することを通じて最新の研究成果を社会に還元する。
		年度目標	継続的な研究活動の推進につながるシリーズ講演の実行や、海外の研究機関との関係づくりに尽力する。
		達成指標	シンポジウム又は講演会5回を目標とし、新型コロナウイルス感染症に対する行動方針に基づき開催方法を検討する。
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		シンポジウムを5回開催した。今年度も新型コロナウイルス感染拡大防止のため4回はオンライン開催とし、1回は危機対策本部会議で審議・承認の上オンライン及び対面併用開催とした。 1/30の国際シンポジウムでは、イタリア人講師3名をzoomで日本の撮影会場と接続し、日本人講師5人と掛け合いながらYouTubeライブでリアルタイムで配信した。同時通訳もつけ、視聴者は日本語チャンネルと英語チャンネルいずれも視聴できるようにし、コロナ下においても国際的な研究活動と研究成果の発信が出来た。当日の録画も無期限で公開している。	
	改善策	—	
No		評価基準	社会連携・社会貢献
4		中期目標	公開講座や寄付講座の継続実施に向け、適切なテーマ・開催方法等を検討する。
		年度目標	学外研究者及び一般参加者を対象とした公開講座を実施し研究成果を公開することで、社会貢献する。
		達成指標	公開講座は2007年度から毎年実施しており、2016年度から受講料を無料とした。毎年行われる公開講座として一部の研究者には認知度が高いが、更に多くの方に参加頂けるよう周知及び開催する。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		公開講座もオンラインで開催した。昨年度はzoomを利用したが、今年度は撮影及びYouTubeライブでの配信とし、後日の録画公開も無期限で行うこととした。これまでも当日に参加できない方から資料や録画提供の要望があったが、それらに応え、今後も多くの方にご視聴頂けるものになったと考えている。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

	改善策	—
<p>【重点目標】 研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献</p> <p>【目標を達成するための施策等】 今年度も新型コロナウイルスの影響及びデジタル化等への要望が高まることが予想されるので、新しい方式を取り入れながら適切で活発な研究活動が行われるよう運営する。</p> <p>【年度目標達成状況総括】 2021年度イノベーション・マネジメント研究センターとしては目標をほぼ達成し、活発な研究活動と研究成果の発信ができたと考える。2020年度に続き、新型コロナウイルス感染拡大防止対応を迫られたが、適切な研究活動と運営ができた。特に、シンポジウム・公開講座のオンライン配信及び録画公開は好評を得ている。今後も新しい方式を取り入れながら適切で活発な研究活動が引き続き行われるよう運営したい。</p>		

【2021年度目標の達成状況に関する大学評価】

<p>イノベーション・マネジメント研究センターの「研究活動」については、研究成果物の質と量の向上を図ることを掲げている。2021年度は叢書2冊の発刊（達成指標は2冊）、学術雑誌掲載論文11本（同、10本）、ワーキングペーパー9本（同、10本）であった。ワーキングペーパーのみ未達であったが、学術論文掲載論文は目標を上回ったことから、A評価は適切である。</p> <p>「社会貢献・社会連携」については、①継続的な資料収集と適切な保管、②継続的な研究活動の推進につながるシリーズ講演の実行と海外の研究機関との関係作り、③学外研究者及び一般参加者を対象とした公開講座の実施を掲げている。①については、2021年度の目録登録数は1,279冊であり、明確な判断基準はないものの、絶対数からは相当程度評価される。②については、5回のシンポジウムの開催と、リアルタイムでのオンライン配信、アーカイブによる動画配信を行った。シンポジウムの開催回数は目標の5回を達成しており、加えて動画配信を行うことにより本研究センターの活動を社会に発信することができたといえる。③については、2021年度はライブ配信とアーカイブによる動画配信を行った。これらの事実・実績からS評価は適切である。</p> <p>重点目標である「研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献」については、上記の事実・実績により達成されたと評価される。</p>

IV 2022年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	研究プロジェクトを公募し、研究のサポートを行うとともに、所員の研究成果を学術雑誌、研究叢書、およびワーキングペーパーの形で積極的に発信する。さらに、特色あるデポジット・ライブラリーを構築し、他に類のない体系的な図書・資料をコレクション方式により重点収集、整理、公開利用を行うと共に、収集した図書・資料の活用を通じて調査・研究の向上に寄与する。
	年度目標	研究成果物の質と量の向上をはかる。所員に広く申請を促し、進捗管理を行う。
	達成指標	叢書2冊の発刊、学術雑誌に掲載する論文数10本（研究ノートや寄稿等も含む）、ワーキングペーパー10本を目指す。
No	評価基準	研究活動
2	中期目標	研究活動をより充実させるために、外部資金の獲得に取り組む。
	年度目標	科研費への申請を所員に要請する。 受託研究、共同研究他外部資金の獲得に取り組む。
	達成指標	所員の科研費申請率7割、受託研究又は共同研究の実施1件を目指す。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
3	中期目標	継続的な資料収集を通じて、ライブラリーの充実を図ると共に、研究者また学生への資料提供を行うことで、様々な産業の研究の促進、また人材の育成に貢献する。
	年度目標	継続的な資料収集と、これらの貴重資料の適切な保管、長期的な維持を目指した取組を行う。
	達成指標	特に貴重資料を中心に資料収集を行い、配置の際には除菌を施すこととする。また資料を保

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

		管している書庫の環境保全・発生防止に努める。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
4	中期目標	シンポジウム、公開講座等を開催することを通じて最新の研究成果を社会に還元する。
	年度目標	継続的な研究活動の推進につながるシンポジウム、シリーズ講演の実行や、海外の研究機関との関係づくりに尽力する。
	達成指標	シンポジウム又は講演会5回を目標とする。新型コロナウイルス感染症に対する行動方針に基づきながら対面開催併用についても検討する。
<p>【重点目標】</p> <p>研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>今年度も新型コロナウイルスの影響が続き、またデジタル化等への要望が高まることが予想されるが、研究交流が活発に行われるよう、オンラインと対面のハイフレックス型の研究会やシンポジウムを実施していく。また、適切な研究活動が行われるよう運営する。</p>		

【2022年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

<p>イノベーション・マネジメント研究センターの「研究活動」については、前年度に引き続き研究成果物の質と量の向上を図ること、科研費、受託研究、共同研究等による外部資金の獲得に取り組むことを掲げるとともに、昨年度と同水準の定量的な達成指標も明示していることから、具体的かつ適切であると評価される。</p> <p>「社会貢献・社会連携」についても、前年度に引き続き、シンポジウム、シリーズ講演の開催と海外の研究機関との関係づくりへの尽力を掲げるとともに、昨年度と同水準の定量的な達成指標も明示していることから、具体的かつ適切であると評価される。</p> <p>重点目標についても引き続き「研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献」を掲げており、これを達成するための方策として、オンラインと対面のハイフレックス型の研究会やシンポジウムの実行を挙げている。コロナ禍の状況下において開催形式の制約がある中で、昨年度の経験を活かしたシンポジウム等の同時配信、アーカイブ配信に加えて、対面開催を希望する者に対してハイフレックス型を採用する姿勢は高く評価される。</p>
--

【大学評価総評】

<p>イノベーション・マネジメント研究センターの2021年度の研究活動、社会貢献・社会連携はいずれも、コロナ禍においても活発に行われており、かつ目標をおおむね達成できた点は高く評価される。特に、シンポジウム、セミナーの開催、研究叢書及びワーキングペーパーの発行、資料の収集と保管、科研費及び外部研究資金獲得への応募と採択については研究活動と社会貢献・社会連携の観点から高く評価される。また、昨年度の課題として指摘された書評や引用数などの把握も実現しており、これらを継続的に把握するためのシステムの基礎ができたといえる。</p> <p>シンポジウム等のオンライン開催は、コロナ対応として必然的に行われたものと考えられるが、これを逆手にとって、イタリア現地から3人の研究者の登壇を実現した点や、ライブ配信及びアーカイブによる動画配信を実現した点は、機材や操作に必ずしも慣れていない所員の努力も含めて高く評価される。</p> <p>また、こうした取り組みは、重点目標である「研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献」に対する課題として昨年度指摘を受けた「オンライン化、デジタル化等の新しい方式を取り入れながら、適切で活発な研究活動が行われるよう期待される。」にも解を提示したものとして高く評価される。</p> <p>一方で、研究センターの運営については、点検・評価体制に一部不十分かと思われる点が見られるほか、事務職員やRAの人的課題も見受けられる。イノベーション・マネジメント研究センター自体のマネジメントについて、引き続き改善策を検討されたい。</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。